



JSPS Strasbourg Office Quarterly / 2010-11 No.1

日本学術振興会ストラスブール研究連絡センター活動報告 (2010年4月～6月)



左から、木戸場副センター長、Mme.Caroline BLATZ (日仏学会館職員)、中谷センター長、Marie-Claire LETT 教授 (日仏学会館長、フランス JSPS 同窓会会長)、濱田国際協力員 (ストラスブール大学植物園にて)。

今春のストラスブールは、例年になく雨の多い春となりました。しかし、5月の第1回仏独 JSPS 同窓会、ボン・ストラスブール研究連絡センター共催フォーラム時には天候に恵まれ、多くの出席者を得て成功裡に終えることができました。

当センターでは、4月に新年度を迎え、熊本大学から濱田直人さんが国際協力員として着任されました。新しいスタッフを迎え、気持ちを新たにするとともに、日仏学术交流のさらなる発展に寄与すべく、当センターのある日仏学会館と連携を深め、2010年度も業務に邁進していく所存です。



第1回仏独 JSPS 同窓会、JSPS ボン・ストラスブール・センター合同フォーラム「Food Science and Society」の開催について

本フォーラムは、2010年5月21日～22日の2日間にわたり、ストラスブール大学の Institute of Chemistry にて、仏独 JSPS 同窓会、JSPS ボン・ストラスブール研究連絡センター、ストラスブール大学の共催により開催され、Alain BERETZ ストラスブール大学学長、軽部洋 在ストラスブール日本国総領事、Henri DREYFUS ストラスブール市長代理、小野元之 JSPS 理事長の出席の下、日仏独約 300 名の参加者を迎えて盛大に行われました。2 国にまたがる JSPS 同窓会や研究連絡センターがフォーラムを共催するのは、今回が初めてです。



フォーラム会場のストラスブール大学化学部棟前にて記念撮影。

本フォーラムでは、人間の最も基本的な生活要素の一つである「食」に関して、学際的な視点からテーマを取り上げ、日仏独の異なる分野の専門家 12 名を講演者として招きました。哲学、社会学、医学、栄養学、神経科学、地質学、調理科学、美味学等の分野から、「健康」、「嗜好」、「食の供給」に関わる最新の研究結果についての講演および質疑応答が行われ、「食の科学」が多くの異分野の科学に立脚していること、「食の文化」が日仏独の人々の豊かな知識になりつつあることが伺えました。

フォーラムの開会式では、中谷陽一ストラスブール研究連絡センター長の開会宣言の後、小平桂一ボン研究連絡センター長の司会により、まず JSPS フランス同窓会 Prof. Marie-Claire LETT 会長、JSPS ドイツ同窓会 Prof. Heinrich MENKHAUS 会長がフォーラムの趣旨を述べ、続いてフランス側からストラスブール大学 Alain BERETZ 学長、ストラスブール市長代理 Henri DREYFUS 氏、日本側から軽部洋 在ストラスブール日本国総領事からご挨拶いただきました。また、小野元之 JSPS 理事長のオープニング・スピーチでは、JSPS フェロシップ事業の意義と成果、そしてドイツから始まった同窓会設立の経緯と発展について紹介されました。



オープニング・スピーチ : Lett フランス同窓会会長 (上段左) Menkhaus ドイツ同窓会会長 (上段中央)、Beretz 学長 (上段右)、軽部総領事 (下段左)、Dreyfus 市長代理 (下段中央)、小野理事長 (下段右)

オープニング・スピーチに引き続き、日仏独の研究者から最新の研究成果に関する講演が行われました。以下、講演の概要を報告します。





講演者 : Eva BARLÖSIUS (Leibniz Universität Hannover)

"Social perceptions and attitudes towards corpulent children and adolescents" 「肥満児に対する社会知覚」

肥満の原因は非常に多様であり、様々な対処法がありうる。肥満児に対する聞き取り調査から、彼らがどのように肥満を受け入れ、日々考えているかを解析した。肥満であることで、周りから怠惰であったり病気であったりすると思われるしており、肥満児においては諸悪の根源を体形に結び付けてしまいがちである。一般的に想像されるのとは異なり、肥満児は栄養の知識や運動の重要性について、正常体重の児童と同様に認識していた。

講演者 : 三坂巧 (東京大学大学院農学生命科学研究科) *"Food palatability and its cognition"* 「食品の嗜好性と認識機構」

食品の味は嗜好性を決定する重要な因子である。基本味の受容については、脊椎動物間で共通な機構が存在する。魚類においても哺乳類と相同な味覚受容体が発現しており、嗜好性の味と忌避すべき味が異なる受容体で認識される。一方、酸味を甘味に変換する味覚修飾タンパク質の活性発現にも味覚受容体が関係しており、酸性条件下でヒト甘味受容体を強く活性化することが、酸味を甘味に変換する現象の原因であると判明した。



講演者 : Benoist SCHAAL (Centre des du Gûot, CNRS) *"Multiple influences on the transmission of food preferences: from biology to culture"* 「多様な因子が食物の好みの伝達に影響する : 生物学から文化まで」

人間は、母親を介して与えられる環境中の化学情報を受容しながら成長し、このような環境からの影響が、社会的ネットワーク形成や生活習慣など個々人の文化を決定する。母から乳児へ伝達される香りや風味の情報によって、子供の情報処理能力や適応力が形成される結果、例えば両親の食の好みが生徒に引き継がれるという現象が起こる。動物実験により、母乳を介して与えられた香り物質が生徒にも好まれることや、この現象へのフェロモンの関与なども明らかにされている。

講演者 : Heiner BOEING (Deutsches Institut für Ernährungsforschung Potsdam-Rehbrücke (DIFE)) "*Preventive aspects of food use*" 「食べ物利用における予防学的見地」

食物(食生活)と病気のリスクの関連性についての研究は、その予防の機会を生み出します。これまで、ヨーロッパにおいて多くの一般人が参加した調査では、いくつかの食品群が、慢性病のリスクと関連するのとの研究結果がでました。したがって、食物や食物の組み合わせが慢性病防止の適切な候補となりうることを示しました。このような食べ物に関する疫学的研究は、食事のガイドラインの基礎を形成しました。



講演者 : 芦苺基行 (名古屋大学生物機能開発利用研究センター) "*Gene pyramiding breeding contributes world food supply*" 「食料危機を回避するための穀物育種」

開発途上国では、飢餓やそれに関連する病気のため、毎日2万5千人が命を落としており、そのうち、5歳以下の子どもが1万4千人を占める。今後、これらの食糧問題を解決するためには、イネ、コムギ、トウモロコシ等の重要穀類の収量を増加させることが必要である。最近、収量性の増加など有用農業形質を支配する遺伝子が単離され始めた、これらの遺伝情報を用いた穀物育種が食糧危機を救う1つの手段となり得るだろう。

講演者 : Harald LEMKE (Lueneburg University)・小川侃 (人間環境大学) "*Food philosophy - an ethical and a phenomenological approach*"

「食事の哲学 倫理的なアプローチ」: 食事の意味を哲学的に解きほぐし解明する。グローバルな社会と人類とがもつ自然への関連、ついで、食事と栄養に関わる生化学との関連が指摘できる。食の栄養学的な生化学に欠如しているのは、全体性を描出するという観点である。

結論として食事の持つ三つの美德を指摘できる。まず、消費者の美德とは、健康、環境、人間と動物の関わり、正義のセンスなどを考慮して、より良き食の世界を創造することだ。第二に、料理の美德。より多くの時間を料理に割り、料理に知的な関心を持つようにすれば、味覚と料理の創造性を磨く倫理的な自己に到達する。第三に、孤食ではなく、人々と懇親しながら食事を楽しむことにより優れた良き自己に到達する。





「食事の哲学 現象学的アプローチ、京都の茶懐石料亭の事例に即して」：
健康な人間は、食事の快樂を得ることができる。健康な人は運動により飢餓感もち、これはおいしい食事を実現する。美しい食事の第二の条件は、良き環境である。食事の妨げになる臭い、騒音が無いこと。さらに、料理がよい味がすること。よい味は、まず材料が新鮮であること、(たとえ発酵食品でも開封されたばかりのものであること。)良き料理は、塩味、甘み、苦味、酸味、それにうまみが渾然一体となって調和が取れている。さらに、料理として見栄えがよいこと、つまり美しく見えることが必要である。要するに、「美しさ、味わい、健康」は、ひとつに結びつき渾然一体となっている。このことは、特に日本の古都、京都の左阿弥という円山公園の頂上にある茶懐石料亭の写真を基にして例示した。ひと言で言えば、良き雰囲気における食事は美しく且つ美味である。

講演者： Claude SITTLER (Sedimentary Geology, CNRS-University of Strasbourg) " *Alsace terroirs and wines* " 「アルザス地方の土壌とアルザスワイン」

ライン河谷は、およそ 4500 万年前に山地が陥没してできた地層で、それがアルザス地方の地質学的複雑さの原因である。アルザスのブドウ畑は、地質学的に 13 タイプの土壌に分類される。7 種類のアルザスワインは、それぞれのブドウの品種から作られ、各品種の生理学的に必要な無機成分量が異なる。それ故、まずブドウの品種と土壌の適合性が探求された。ついで、土壌構成成分のうち、3 成分 (砂岩、石灰石、粘土) の比率が、土壌の物理的性質、化学的性質、そして 7 つのアルザスワインのそれぞれが持つ風味の特徴を決めることが解説された。



5月22日(土)セッション : 司会- Anne-Lise Poquet-Dhimane / Gernot Beisler / Nobuji Nakatani



講演者： 清水誠 (東京大学大学院農学生命科学研究科) " *Amazing potential of food to keep us healthy* " 「健康を維持する上で食品が示す驚くべき能力」

高齢社会における生活習慣病の抑制を目指して日本が推進した機能性食品研究は、科学的根拠のある健康増進食品である特定保健用食品(トクホ)を生み出した。整腸、血圧上昇抑制、肥満抑制などの生理機能を持つ多様なトクホは今や大きな市場を形成している。多額の開発費、食品機能ならではの研究の難しさ、制度上の問題など、多くの問題も存在するが、社会からは抗疲労、免疫調節、皮膚改善など多様な新規機能を担う食品群の研究開発も期待されている。

講演者: Hervé THIS(Groupe de Gastronomie moléculaire, INRA/AgroParisTech et Fondation Science & Culture Alimentaire (Académie des sciences))

Hubert MAETZ (Chef of Hostellerie du Rosenmeer)

Aline KUENTZ (Cuisine Aptitude)

"Molecular gastronomy and "note by note cookery"「分子美味学と料理の楽譜に合わせたクッキング」

分子美味学(モレキュラー・ガストロノミー)という科学の1分野が、1988年にNicholas KURTIと演者のHervé THISによって提唱され、20年経った今、多くの国で発展している。例えば、新しい調理器具・食品成分・手法を用いる分子クッキング(モレキュラー・クッキング)が有名なレストランのシェフたちによって採り入れられたり、シェフの養成課程での1調理方法に加えられたりするようになった。「モレキュラー・ガストロノミー」をさらに発展させるためには、調理プロセスの綿密な基礎研究が重要である。本フォーラムでは、料理の楽譜に合わせたクッキング(「note by note cooking」)の1例がシェフらによって実演された。



左から Hubert MAETZ 氏、Dr. Hervé THIS、Aline KUENTZ 氏。

セッションの終了後、中谷陽一ストラスブル研究連絡センター長から、2日間にわたるワークショップについての総括、食にかかわる研究分野の日仏独研究の方向性について述べられました。続いて、小平桂一ポン研究連絡センター長の司会のもと、JSPSの加藤久参事より当フォーラムの共催機関のJSPS 仏独同窓会、支援機関の在ストラスブル日本国総領事館、ストラスブル大学、ストラスブル市、バ・ラン県、アルザス州、日仏大学会館、およびフォーラム参加者に謝辞を述べられるとともに、今回の共催フォーラムを契機とし、今後の同窓会ネットワークの発展・強化について展望され、盛会のうちに閉会いたしました。



謝辞を述べられる加藤参事。



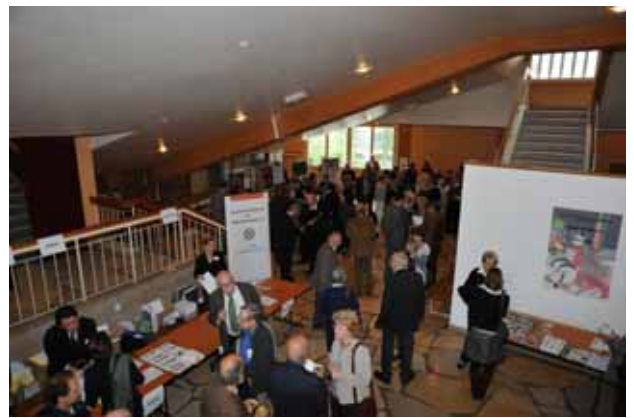
フォーラムを総括される中谷センター長。



閉会式の司会をされる小平センター長。



フォーラム会場の様子。



コーヒーブレイク中のコマ。



乾杯の挨拶をされる小野理事長。



JSPS 主催レセプションの様子。

また、フォーラムに先立ち、5月20日には在ストラスブール日本国総領事館主催のレセプションが開催され、日仏独の講演者およびフォーラム関係者等が招待されました。レセプションでは、軽部総領事から歓迎の御挨拶とフォーラムを通じ、日仏独の更なる交流発展の期待が寄せられました。

5月21日のフォーラムの開会に先立ち、アルザス州の地方紙の一つ「Alsace」紙からフォーラムに関するインタビューを受け、小野理事長やフォーラム主催者がフォーラムの趣旨、JSPS 事業および JSPS 同窓会の紹介を行いました。

さらに、5月22日フォーラム終了後には、ポスト・フォーラムのイベントとして、参加者はストラスブール市内を流れるイル川の遊覧船に乗船しました。当イベントは、ストラスブール市よりご支援いただき、参加者は欧州議会会場や世界遺産に登録されたストラスブール市内を見学しました。



5月20日、総領事公邸にて、軽部総領事主催のレセプションの様子。



5月21日、地方新聞「Alsace」の Geneviève DAUNE-ANGLARD 氏(右端)記者からフォーラムに関するインタビューを受ける関係者。



5月22日、ポスト・フォーラムにてイル川の遊覧船に乗船する参加者。



5月22日、フォーラム終了後のランチにて歓談する参加者。

今回のフォーラム開催にあたり、共催機関のストラスブール大学 Alain BERETZ 学長、レセプションを開催いただいた軽部洋総領事、齋藤彩子領事、フォーラムの準備から当日の運営支援まで幅広く協力いただいた日仏大学会館の Caroline BLATZ 氏、ストラスブール大学の大学院生や化学部学生クラブ“Alcane”、ストラスブール市、バラン県、アルザス州等その他多くの方々から多大なるご協力・ご支援をいただきました。また日本の大学（東京大学、名古屋大学、京都大学）より資料をご提供いただきました。この場を借りて、厚くお礼を申し上げます。



日仏大学会館との学術セミナー及びストラスブール大学（UDS）との Joint Seminar の開催

ストラスブール日仏大学会館と共催で、日仏の研究者を招待して、様々なテーマで学術セミナーを開催しています。また、フランスの大学を訪れる日本人研究者を支援する一環として、ストラスブール大学との UDS/JSPS ジョイントセミナーも開催しています。2010年4月から6月までの間に、以下のセミナー6回を日仏大学会館等にて実施しました。

6月8日 / 第87回学術セミナー

講演者：石井三記 教授（名古屋大学）

講演タイトル：「日本における法と正義の過去と現在」

“Le passe et le present du droit et de la justice au Japon”

日本の法について、604年に出された聖徳太子の『十七条の憲法』から時代を追って日本の法制度を解説されるとともに、21世紀初頭において日本の法状況は様変わりしつつあると指摘された。また、裁判員制度や法科大学院制度の導入、死刑制度についても言及され、日本における法と正義（司法・裁判）の歴史を跡づけておくことは、未来を見据えるためにも興味深く、また必要であると述べられた。



日本の法制度の歴史を解説する石井教授。

6月11日 / 第31回 UDS/JSPS ジョイントセミナー

講演者：伊藤嘉浩 主任研究員（理化学研究所）

講演タイトル：「オリゴヌクレオチドを用いた生体分子工学-遺伝子検出、siRNA、アプタマー」

“Biomolecular Engineering Using Oligonucleotides: Gene Detection, RNAi, and Aptamers”

本セミナーでは、化学とバイオテクノロジーを融合することによって新しい機能性生体材料を設計し合成してきた研究の中で、オリゴヌクレオチドを用いた研究を紹介された。第一は生細胞内の遺伝子検出について、第二はsiRNAを分解を受けずに有効にデリバーするために、2本鎖RNAの両末端を閉鎖した「ダンベル型」RNAの設計について、第三は試験管内進化法、SELEX法で選別される小分子、タンパク質、核酸、細胞、組織に結合できる分子のアプタマーについて解説された。



オリゴヌクレオチドを用いた生体分子工学を紹介する伊藤博士。

6月15日 / 第32回 UDS/JSPS ジョイントセミナー

講演者：深畑幸俊 准教授（京都大学）

講演タイトル：「観測データはどれだけの情報量をもっているか？：密なデータのインバージョン解析における共分散成分の重要性」

“How much information do observed data have?: Importance of covariance components in inverting densely sampled observed data”

地球物理学の様々な分野で時空間的に連続な観測データが得られており、コンピュータの進歩により、そのようなデータを高いサンプリングレートで取り出してインバージョン解析することが可能となってきた。しかしながら、密にサンプリングされたデータは互いに独立ではないという問題があり、そのことに注意せずに解析を行うと、全く誤った結果になり得る。本セミナーでは、このような問題を取り扱う際に誤差の共分散成分が本質的に重要であることを、測地データや地震波データの解析例も交えて示された。



データ解析において共分散成分の重要性を説く深畑准教授。

6月17日 / 第88回 学術セミナー

講演者： Prof. Ermanno CANDOLFI (Faculté de Médecine, Université de Strasbourg)

講演タイトル：「トキソプラズマ症」

“Toxoplasma gondii ou l amour aveugle”

トキソプラズマは、Toxoplasma gondii (5-10 ミクロンの原虫) によって引き起こされる、世界中で最も頻繁に見られる原虫感染症である。感染ネコの糞中の原虫の卵（生野菜や生肉を経て）による経口感染と感染妊婦から胎児への感染がある。多くは不顕性で発症は少ないが、筋肉、脳、目に病巣が存在する。フランスでは100万人の感染者がいると推測される。演者の研究室で最近開発された治療法の紹介がなされた。



セミナー後、講演者のCANDOLFI教授（右から6人目）と参加者。

6月18日 / 第33回 UDS/JSPS ジョイントセミナー

講演者：江口正 教授（東京工業大学）

講演タイトル：「アミノグリコシド系抗生物質の生合成」

“Biosynthesis of aminoglycoside antibiotics”

アミノグリコシド系抗生物質の生合成研究はこの10年間で著しく進歩をしてきた。ストレプトマイシン、カナマイシン、プチロシン、ネオマイシンおよびゲンタマイシンなどの多くのアミノグリコシド系抗生物質の生合成遺伝子クラスターが特定された。本講演では、江口研究室のアミノグリコシド系抗生物質生合成研究の成果について紹介された。



アミノグリコシド系抗生物質生合成研究の最近の進歩を解説する江口教授。

6月24日 / 第34回 UDS/JSPS ジョイントセミナー

講演者：西尾元宏（CHPI 研究所）

講演タイトル：「有機化合物、生体高分子における CH/π 水素結合の意義について」

“The CH/π hydrogen bond. Implication in host/guest chemistry, conformation, and biological science”

CH/π 水素結合は、CH と π 系グループの間に働く弱い分子間力である。両グループとも有機分子中どこにでも存在するうえ、化学構造中に纏まっているため協同的に働き、フレキシブルで極めて強い引力になる。また、水中でも機能するので生化学的な含意が大きい。本セミナーでは、ホスト/ゲスト化学、コンフォメーションなど、有機化学的な考察に続き、構造生物学領域における含意について解説された。



CH/π 水素結合の意義について説く西尾博士。



フランスの大学、グランゼコール、研究機関への訪問：JSPS 事業説明会・JSPS 同窓会支部会の実施

当センターは、フランス各地の大学・研究機関を訪問し、大学幹部や研究者と直接に対話を行い、また、その機会に各地の JSPS 同窓会との交流を深めています。

4月12日 / Ecole Normale Supérieure de Cachan (ENS Cachan) 訪問

ENS Cachan は、パリ市内から高速郊外鉄道（RER）に乗り、南へ20分程度行ったパリ南部郊外にあります。1891年に起源を持つ ENS Cachan は、パリ中心部にある Ecole Normale Supérieure（ENS）、リヨンにある Ecole Normale Supérieure de Lyon（ENS Lyon）と共に、グランゼコールの中でもいわゆる “Ecole Normales Supérieures” に属します。この3校はフランスの高等教育機関のうちで、フランスの将来の教育、研究、文化を背負うハイレベルの人材を養成することを目的として、特殊な位置づけがなされ、学長は大統領の任命で、学生は国家公務員となります。2年間のグランゼコール準備クラス後の選抜試験で、極めて狭き門を合格した学生は、恵まれた環境のもと、高度な教育を受け、研究を行う事ができます。そして、学部4年間の最終学年には教授資格（Agregation）の準備に当てられています。

また ENS Cachan は、パリ第11大学、Evry 大学、Versailles-Saint-Quentin 大学等の22の大学・グランゼコール・研究所が加盟し、高等教育・研究省の大学再編政策に沿って2006年に設立された PRES UniverSud（研究・高等教育拠点）のメンバーにもなっています。

ENS Cachan は、3 分野（基礎科学、工業科学、人文社会科学）17 学科から構成され、グランゼコール準備クラスを経た正規学生数約 1,300 名、その他学生数約 760 名（内、留学生 260 名）教員数約 350 名、事務・技術スタッフ約 240 名の規模となっています。研究については、14 の研究科で博士課程の学生も含めて 500 人以上の研究者で行われ、学際的に研究を進められるように 3 つの研究所にまとめられています。

今回の訪問では、Mme. Bogdana SAVU-NEUVILLE（同校国際課長）による訪問アレンジのもと、Prof. Jean-Yves MERINDOL（ENS Cachan 学長）と、日仏研究者交流および 2011 年度の共同シンポジウム開催について意見交換を行いました。また、NEUVILLE 国際課長の司会により、同校の研究者、博士課程の学生を集めての学術振興会事業説明会、Marie-Claire LETT 教授（JSPS フランス同窓会会長）による JSPS フランス同窓会活動のプレゼンテーション、および JSPS-OB2 名による日本での研究生活や経験談が語られ、帰国後も日本の研究者と盛んに学術交流を行っている様子が伺えました。

その後、ENS Cachan の誇る Alembert 研究所（所長：Prof. Joseph ZYSS、2010 年度 Humboldt 賞受賞者）を訪問し、同所長から研究所の組織や研究テーマ（生物工学・応用遺伝薬学、量子・分子光学、超分子・高分子物理・化学光学、情報・エネルギー技術システムと応用）の紹介がありました。続いて、各研究室から研究の概要説明を受けるとともに、研究施設を見学しました。



右から Prof. Bruno LE PIOUFLE (ENS Cachan 教授、前 LIMMS 所長)、中谷センター長、Prof. Jean-Yves MERINDOL (ENS Cachan 学長)、Prof. Marie-Claire LETT (JSPS フランス同窓会会長)、Dr. Robert PANSU (CNRS 主任研究員、JSPS-OB)、Mme. Bogdana SAVU-NEUVILLE (ENS Cachan 国際課長)



JSPS 事業のプレゼンテーション。



Prof. Marie-Claire LETT (JSPS フランス同窓会会長) による同窓会事業のプレゼンテーション。



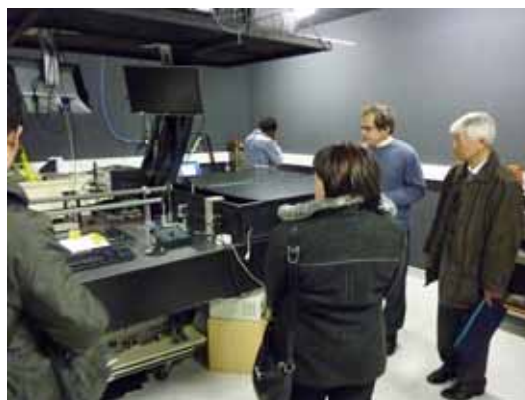
日本での研究生活を語る Dr. Robert PANSU (CNRS 主任研究員、JSPS-OB)



日本での研究生活を語る Prof. Bruno LE PIOUFLE (ENS Cachan 教授、前 LIMMS 所長)



Alembert 研究所訪問。Prof. Joseph ZYSS Alembert 研究所所長(左端)、Prof. Jacques DELAIRE 前 PPSM 研究科長(左から 2 人目)らと。



Photophysique et Photochimie Supramoléculaires et Macromoléculaires(PPSM)研究室訪問。(Dr. Robeert PANSU CNRS 主任研究員、JSPS-OB (右から 2 人目))

4月16日 Institut de Génétique et de Biologie Moléculaire et Cellulaire(IGBMC), Université de Strasbourg (ストラスブール大学生物分子遺伝学研究所) 訪問

ストラスブール大学分子生物遺伝学研究所は、ストラスブール市内から車で 20 分ほど南に行った郊外の Illkirch キャンパスにあります。同研究所周辺には、医薬関係企業や国際宇宙大学もあり、学術研究・産学交流が活発な地域となっています。

同研究所は、ホルモン・レセプター研究の先駆者である Prof. Pierre CHAMBON により、1994 年に設立されました。現在、5 部門 (Biologie Cellulaire et Développement、Biologie du Cancer、Neurobiologie et Génétique、Génomique Fonctionnelle、Biologie Structurale et Génomique) から構成され、研究者 95 名、ポスドク 96 名、客員研究者・学生・博士論文準備者 158 名、事務・技術スタッフ 245 名の規模となっています。同研究所は、世界 40 ヶ国以上の国から研究者、ポスドク、客員研究者・学生・博士論文準備者らが集い、国際色豊かな研究所となっています。また、産業界との産学連携も盛んで、48 の共同研究に関する協定を締結しています。

今回の訪問では、Prof. Olivier POURQUIE (IGBMC 所長)、Dr. Astrid Lunkes 研究担当部長より同研究所の概要説明を受けるとともに、日本学術振興会の事業を紹介しました。また、Lunkes 研究担当部長の司会により、研究者、ポスドク、博士課程の学生を集めての学術振興会プレゼンテーション、Marie-Claire LETT 教授 (JSPS フランス同窓会会長) による JSPS フランス同窓会活動のプレゼンテーション、および JSPS-OB2 名による日本での研究生活や経験談が語られました。

さらに、同研究所の Biologie Cellulaire et Développement 部門を訪問し、研究部門長から研究の概要説明を受けるとともに、研究施設を見学しました。



JSPS 事業のプレゼンテーション。



Prof. Marie-Claire LETT JSPS フランス同窓会会長による同窓会事業のプレゼンテーション。



日本での研究生活を語る
Dr. Marie PASCHAKI
(JSPS-OB)



日本との共同研究を語る
Dr. Jean-Claude
THIERRY (JSPS-OB)



画像センター研究室訪問。Dr. Jean-Luc
VONESCH 画像センター室長(左から2人目)、
Dr. Astrid Lunkes 研究担当部長(右から2人
目)らと。



生物・細胞研究室訪問。Dr. Sophie JARRIAULT
(左から2人目)



IGBMC 本部棟。

6月3日 / Ecole Polytechnique 訪問

Ecole Polytechnique は、パリ市内から高速郊外鉄道 (RER) に乗り、南西へ 30 分、さらにバスで 20 分程度行ったパリ郊外の Saclay にあります。当地域は、フランス政府がフランスの MIT をめざして、一大学術拠点を開発しようとしている地域で、周辺にはフランス有数の大学、グランゼコール、研究所が所在しています。

同校は、当初、公共の土木建築のための中心的役割を担う専門学校として、1794 年に設立されました。1804 年には、ナポレオンが同校を軍に帰属させ、「国家に科学と栄光を」というモットーを残しています。そして、1970 年に、同校は国防省が管轄するグランゼコールとなり、1972 年に初めて女子の学生が入学しました。1995 年には、外国人学生にも入学試験受験の道が開かれ、フランスを代表する理工系最高峰のグランゼコールのひとつです。

Ecole Polytechnique は、パリ近郊にある 12 の名高いグランゼコールや研究所により構成される大学コンソーシアム「パリテック (ParisTech: Paris Institute of Technology)」のメンバー校であり、また「パリテック」は、高等教育・研究省が推進する大学間コンソーシアムの PRES (Les Pôles de Recherche et d'Enseignement Supérieur: 研究・高等教育拠点) の一つとしても認定されています。

Ecole Polytechnique は、現在 10 学科 (生物学、経済学、情報学、化学、人文社会学、数学、応用数学、言語文化コミュニケーション学、機械工学、物理学) から構成され、グランゼコール準備クラスを経た正規学生数約 2,000 名、修士課程学生数約 200 名、博士課程学生数約 550 名、留学生数 700 名、教員数約 660 名、事務・技術スタッフ約 400 名の規模となっています。

今回の訪問では、Prof. Michel BLANC 研究担当副学長、Prof. Michel ROSSO 大学院科長より、PRES ParisTech の新キャンパス構想の概要説明を受けるとともに、日本学術振興会の事業を紹介しました。また、Bénédicte BARRAULT 国際担当官のアレンジにより、研究者、ポスドク、博士課程の学生を集めての学術振興会プレゼンテーション、Marie-Claire LETT 教授 (JSPS フランス同窓会会長) による JSPS フランス同窓会

活動のプレゼンテーション、および JSPS-OB2 名による日本での研究生活や経験談が語られました。

さらに、同研究所の生物化学研究室を訪問し、Dr. Pierre PLATEAU 研究室長から研究の概要説明を受けるとともに、研究施設を見学しました。



JSPS 事業のプレゼンテーション。



Prof. Marie-Claire LETT JSPS フランス同窓会長による同窓会事業のプレゼンテーション。



日本での研究生活を語る
Dr. Michel SABLIER
(JSPS-OB)



Prof. Michel BLANC 研究担当副学長（左から2人目） Prof. Michel ROSSO 大学院科長（右から2人目）に JSPS 事業を説明する中谷センター長（左端）。



日本での研究生活を語る
Dr. Veronique DOQUET
(JSPS-OB)



生物化学研究室訪問。Dr. Piere PLATEAU（左から2人目） Dr. Pierre-Damien COUREUX（左端）。



日本の大学、研究機関等の国際化事業への協力、仏側対応機関、ストラスブール日仏大学会館、在ストラスブール日本国領事館等との連携・協力

当センターでは、フランスにおけるこれまでの活動によって得られた情報、ネットワークの資産を活かして、日本との学术交流に興味のあるフランスの大学、研究機関からの照会に応じています。また、学生レベルでの日仏交流を促進するストラスブール日仏大学会館が主催する事業にも参加・協力を行うとともに、在ストラスブール日本国領事館との緊密な協力関係の構築に努めています。

4月13日 / Bretagne Occidentale 大学極限環境微生物研究所の Daniel PRIEUR 教授が来所され、日仏学会館 Marie-Claire LETT 教授と共に、日仏学術交流や Bretagne Occidentale 大学訪問について話合いました。



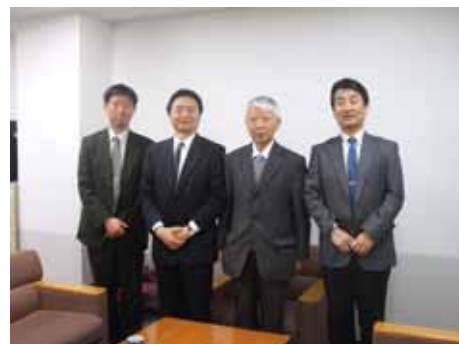
Daniel PRIEUR 教授（右から 2 人目）、Marie-Claire LETT 教授（中央）らと。

4月19日 / JSPS BRIDGE 選考委員会を開催し、今年度のフェロースhip候補者を選出しました。



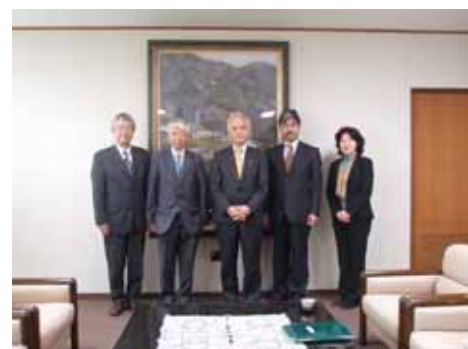
BRIDGE 選考委員会の様子。

4月23日 / 東京大学を中谷センター長が訪問し、貴志辰夫国際系統括長、塩谷光彦教授（理学系研究科）大学幹部と今後の日仏学術交流のあり方について意見交換を行いました。また、日本大学の別府輝彦教授、お茶の水女子大学の永野肇教授（日仏理工科会副会長）、東京工業大学の江口正教授といった日仏学術交流に関係の深い研究者と日仏研究者交流について懇談しました。



貴志国際系統括長（左から 2 人目）、塩谷教授（右端）らと。

4月26日 / 名古屋大学にて、「フランスにおける高等教育・研究の動向と日本学術振興会の活動」と題した中谷センター長の講演会が行われました。また、濱口道成総長、渡辺芳人副総長、山本一良副総長、勝平宏国際部長のほか、大学幹部と日仏学術交流、日仏高等教育制度について意見交換を行いました。さらに、同大学の芦荻基行教授と仏独 JSPS 同窓会、JSPS ボン・ストラスブール・センター合同フォーラムについて打合せ、また石井三記教授とストラスブールでの学術セミナーについて打合せを行いました。



濱口道成総長（中央）、渡辺芳人副総長（左端）、勝平宏国際部長（右から 2 人目）らと。

4月27日 / 立命館大学草津キャンパスを中谷センター長が訪問し、長田豊臣理事長、本間政雄立命館アジア太平洋大学副学長、飴山恵国際部長のほか、大学幹部と日仏学术交流、日仏高等教育制度について意見交換を行いました。さらに、中村尚武教授の司会のもと、「フランスにおける高等教育・研究の動向と日本学術振興会の活動」と題した中谷センター長の講演会が行われました。



講演の様子。(中村教授(中央)と中谷センター長(右端))

4月28日 / 京都大学を中谷センター長が訪問し、西村周三理事(教育・学生担当)、森純一教授(国際交流推進機構長)、吉川研一教授(理学研究科長)、白石賢一外部戦略担当官等大学幹部と今後の日仏学术交流、研究者交流について意見交換を行いました。



西村理事(左から2人目)、森機構長(右から4人目)、吉川理学研究科長(左端)らと。

4月30日 / 上智大学を中谷センター長が訪問し、Jean-Claude HOLLERICH 副学長、佐藤哲彦国際学術情報局局長、熊倉鴻之助教授(生命科学研究所)、近藤次郎助教(生命科学研究所、元 JSPS 海外特別研究員)と今後の日仏学术交流、研究者交流について意見交換を行いました。



Jean-Claude HOLLERICH 副学長(左から2人目)、佐藤局長(左端)、熊倉教授(右端)らと。

4月30日 / 日本大学駿河台キャンパスを中谷センター長が訪問し、岩村秀教授(総合科学研究科)の司会により、50人の聴衆を前に「Search for the most primitive membranes」と題した学術講演会が行われました。また、同大学の澤口孝志教授、西宮伸幸教授、大月穰教授らと化学分野の日仏学术交流について意見交換を行いました。



中谷センター長による学術講演会の様子。

5月10日 / 北海道大学大学院理学研究院から、加藤昌子教授が来所され、中谷センター長と北海道大学とストラスブール大学の学術交流について打合せを行いました。

5月11日 / ボン研究連絡センターより、宮元博央副センター長が来所され、仏独 JSPS 同窓会共催フォーラムに向けた打合せを当センターにて行いました。

5月13日 / 仏独 JSPS 同窓会共催フォーラムのフランス側講演者 Mr. Hubert MAETZ (Chef, Restaurant Rosenmeer) および Ms. Aline KUENTZ (Cuisine Aptitud) と、当日の講演に合わせた料理実演の内容と方法について打合せを行いました。打合せには、中谷センター長および Marie-Claire LETT 教授 (仏 JSPS 同窓会会長) が出席しました。



打合せの様子。Hubert MAETZ 氏 (左から2人目)、Aline KUENTZ 氏 (右端)。

5月20日 / 日仏学会館にて、JSPS 欧州同窓会幹部会が開催され、Prof. Marie-Claire LETT (フランス同窓会会長)、Prof. Dr. Heinrich MENKHAUS (ドイツ同窓会会長)、Dr. John FOSSEY (イギリス同窓会幹部)、Prof. Jan Sedzik (スウェーデン同窓会会長)、Prof. Matts Roos (フィンランド同窓会幹部)、JSPS 本部から加藤久参事、小平桂一ボン研究連絡センター長、中谷陽一ストラスブール研究連絡センター長らが出席し、欧州における JSPS 同窓会活動の更なる連携について議論が行われました。



欧州同窓会幹部会の様子。

5月27日 / HFSP の桜井繁事務官と田中朗彦事務官が来所され、桜井事務官の退任及び田中事務官の着任のご挨拶がありました。

6月2日 / パリの CNRS 本部を訪問し、Dr. Minh-Hà PHAM-DELEGUE (CNRS 国際部長)、Monique BENOIT 氏 (CNRS 国際部 Asia-Pacific 担当) とともに、2010 年度外国人特別研究員 (欧米短期) 第二回選考会を開催しました。当センターでは、本会事業である外国人特別研究員 (欧米短期) を CNRS と共同選考し、採用候補者を東京本部に推薦しています。



合同選考会の様子。Dr. Minh-Hà PHAM-DELEGUE (右端)、Monique BENOIT 氏 (右から2人目)。

6月2日 / ルーブル美術館研究所 (C2RMF) を訪問し、Dr. Michel MENU 研究部長と本年 11 月開催予定のフランス文化庁、CNRS、JSPS 共同ワークショップ“Science for conservation of cultural heritage”の打合せを行いました。



打合せの様子。Dr. Michel MENU 研究部長 (中央)

6月25日 / 日本-ストラスブール親睦会主催の ENA(フランス国立行政学院)の見学会に、日仏大学会館館長 Marie-Claire LETT 教授と共に、ストラスブールセンターの 3 名が参加しました。ENA についての概要説明と各施設の紹介がありました。



ENA のキャンパス。

冒頭でもお知らせいたしましたが、濱田直人 国際協力員 (熊本大学職員) が、当センターでの 1 年間の研修ため、2010 年 4 月より着任しました。着任早々、研究機関訪問、昨年度の会計処理等用務が続きましたが、持ち前の粘り強さを活かし、即戦力として活躍されています。

日本学術振興会ストラスブール研究連絡センター / JSPS Strasbourg Office

42a, avenue de la Foret-Noire 67000 Strasbourg, FRANCE

Tel : +33 (0)3 68 85 20 17 / Fax : +33(0)3 68 85 20 14

HP : <http://jsps.u-strasbg.fr/>
